

小児科

1) 診療科紹介

- 京都市南部の中核病院小児科として、小児の一般的疾患および専門的疾患（小児循環器、小児神経、小児アレルギー喘息）の診療（外来、検査、入院）にあっております。本院は小児のプライマリ疾患症例が大変多く、特に小児救急診療には病院の全面的な理解を得て、1年 365 日休みなく 24 時間体制で一次救急から三次救急まで対応できるようにしております。年間受け入れ患者数は外来全患者約 40000 人、休日・時間外外来約 10000 人、入院 800~900 人程度です。

2) 小児科後期研修の特徴

- 日本小児科学会認定研修施設である。
- 3名の日本小児科学会専門医の指導を受けられる。
- 大学病院や特定機能病院では十分に研修できない一般小児科疾患患者を多数経験する事ができる。
- 地域の病院小児科として中核をなしており、未熟児・新生児を除く極めて豊富で多彩な疾患を経験できる。
- 圧倒的に多い小児救急の研修ができる。
- 小児アレルギー・喘息、小児循環器、小児神経など小児科のサブスペシャリティ分野の勉強もできる。

3) GIO

- 小児科専門医として必要な小児医療全般にわたる多くの基本的知識・技術・態度を習得する。

4) SBOs

- 小児や家族と良好な医師・患者関係を築き、小児の病気のみを診るのではなく、家庭環境などにも配慮しながら、小児患者も人として尊重、全人的に診療する。
- 小児の正常な発育発達・検査値などを理解し、それぞれの発育段階にある小児に対して適切な評価をし、診療する。
- 小児を不安がらせたり、泣かせたりしないよう配慮した小児科の診療方法・技量を身につける。
- 四肢も含めた全身の診察を行い、患者の全身状態を判断、トリアージできる能力を身につける。
- 乳幼児・小児に対する一次二時救命処置ができる。新生児の蘇生処置ができる。
- 小児科外来では救急も含め、一般的なトリアージの原則にしたがって行動、重篤な

状態には速やかに対応する。

- 小児に特有な心身病態生理を理解し、的確に対処する。
- 小児のプライマリケアに関する幅広く深い知識と経験を持ち、患者家族に適切な指示・指導を行い治療できる。
- 小児期一般的感染症に関する豊富な知識と経験を有し、患者家族に適切な指示・指導を行い治療できる。
- 乳幼児健診・予防接種などに関する一般的知識を持ち、患者家族に適切な指示・指導をする。
- 新生児も含めた小児の採血や動静脈ルート確保を確実に施行、腰椎穿刺・骨髄穿刺・胸腔穿刺などの処置も安全に遂行できる。
- 検査や治療に必要な小児の鎮静法を適切に選択、安全に施行できる。
- 各種画像診断検査の正確な読影ができる。
- 小児における体重（体表面積）当たりの薬用量を理解し、薬剤の剤型や外観・味・色に対する知識を持ち、服用コンプライアンスにも配慮して小児に最も適した処方を行い、患者家族や看護師に指示説明できる。
- 小児特有の薬剤副作用や使用制限・使用上の留意事項などに関し、深い知識を有し、患者家族に的確に説明、安全で安心できる治療をする。
- 輸液の適応を的確に判断し、その病態や体格に応じた輸液の種類、初期投与速度、維持量などの輸液スケジュールを正しく作成実施できる。
- 脱水の重症度を判断でき、適切な処置がとれる。
- 腸重積や虫垂炎・精索捻転などを含む小児急性腹症の診断を的確に行い、外科にコンサルトできる。

5) Ls

- **On the job training(OJT)**が主体である。
- 5~10 人の入院患者を受け持つ。
- 一般外来（2 診）も週 1~2 回担当する（指導医は 1 診で診療しているのでいつでもコンサルト可能）。
- 小児科当直も月 2~4 回行う（指導医は待機）。
- 卒後 4 年目より初期臨床研修医の指導を行う。
- 科内外の各種カンファレンスに参加する。
- 当院のみでは十分な研修が行えない未熟児や血液・悪性腫瘍分野は関係他院で研修できる。
- 学術活動
 - 学会発表：地元の研究会や日本小児科学会（京都地方会）等で発表する。
 - 論文執筆：症例報告、臨床研究などを執筆する。

6) Ev

- カンファレンスでの発表等で評価を受ける。

7) 大学医局との関連

- 京都大学小児科からの派遣医師が多く、京大関連病院との人事交流も盛んであるが、これに関するこだわりは全くない。

8) 将来の進路

- 選考により、武田病院グループの常勤小児科医師として勤務できる。
- 小児科サブスペシャリティ分野研修のため、高度専門病院・特定機能病院（循環器・神経など）での研修継続。
- 京都大学小児科関連病院への就職斡旋
- 大学院進学